

不動明王

當山本堂の内陣右手には護摩壇があり、護摩を焚くことが出来る。その壇に向かって正面にいらっしゃる仏が不動明王である。一般的に「お不動さま」の名前で親しまれている仏様である。

・名前について

不動明王は梵名をアチャラ・ナータといい、アチャラは「不動」、ナータは「尊者」を意味する。つまり不動明王とは、動かない、不動の状態であ住する尊者という意味が名前から分かる。そして不動の状態とは、「菩提心ぼだいしんが不動である状態」のことである。菩提心ぼだいしんとは悟りを求める心のことであり、それが不動であるということは、何があっても悟りを求める仏道に邁進するということである。また、明王の「明」とは、煩惱の闇を照らす智慧の光明こうみょうのことである。その「王」であるということは、まさに煩惱に日々悩まされる我々にとって不動明王とは、もっとも頼りがいのある仏なのかもしれない。

・お姿について

不動という状態を象徴する比喻に「山」が用いられることが多いが（動かざること山の如し）不動明王の足元に目を転じると、まさに山のような盤石の上にいらっしゃる。そして、右手には智慧の利剣を持って我々の煩惱を断ち切り、左手には羅索けんさく（繩）を持って迷えるものを絡めとり救って下さるのである。當山の不動明王は、右手に持する利剣には龍が巻き付いている。この龍は名前を俱利伽羅龍王くりからりゅうおうといい、外道を飲み込むとされている。また、後方には迦楼羅炎かるらえんという大火炎を纏っている。

・迦楼羅炎について

迦楼羅かるらとはガルダ（ガルーダ）のことであり、インド神話の中に登場する鳥の王様のことである。この迦楼羅が羽を広げた時の火焰を迦楼羅炎かるらえんという。迦楼羅は猛龍毒蛇を食するというが、それが転じて我々の煩惱をも食らい尽くすとされる。當山の尊像では、注視すると迦楼羅かるらの顔を確認することが出来る。また、炎は全身の怒りの象徴でもあり、不動明王が我々の煩惱を断滅して一切の災いを焼き尽くす境地である「火生三昧かしょうさんまい」に入っていることを表す。そして、

お顔の鋭い眼力は邪よこしまなものよこしまが近づくことを防ぐ為である。

・大日如来と不動明王

真言宗では、宇宙に満ち満ちている根源的大生命を大日如来と名付けている。大日如来は我々に様々な形で働きかけをして下さっているが、我々はなかなかそれに気が付くことが出来ない。その様々な働きかけの中でも、親が言うことを聞かない我が子に対して慈愛を持って叱るように、大日如来が我々に対して、あえて怒りのお姿をとって働きかけて下さったその頭れがまさに明王なのである。そして特にその中心となるのが不動明王なのである。

・四大明王

當山では、不動明王を囲んで四大明王と呼ばれる明王達が須弥壇上にいらっしやる。

降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王である。それぞれが異形で怒りの形相をされており、悪を調伏するお姿を表している。

・二童子について

また、不動明王の足元には、向かって右側に矜羯羅、左側に制叱迦という二人の童子が侍っている。どちらも不動明王の眷属である。矜羯羅は大人しく従順な性格を持ち、制叱迦は少し荒々しい性格のようである。この二童子は不動明王の二面性を表しているともいえる。

・不動明王と護摩について

護摩とは、炉に火を焚きながらその中に様々な供物を捧げる拜み方である。基本的にはそれぞれの仏に対して護摩があるが、一際有名であるのが不動明王に対する護摩である。その理由は明確であり、護摩の火と不動明王の迦楼羅炎に包まれたそのお姿が強く結びつくからに他ならない。前述のように、不動明王の迦楼羅炎は煩惱を焼き尽くす炎であったが、護摩で焚かれる炎も同様であり、焚かれる炎を自身の中に入れて煩惱を焼き尽くすことを想いながら参列することが肝要である。

・ご利益について

不動明王は一見するとそのお姿からとても厳しい仏に見える。しかしその怒りの表情は我々に対する慈愛の心の裏返しであり、我々の煩惱を何としてでも断滅して、より良く生きる為の心の在り様を指し示して下さる。我々はその厳しいお姿を拜する度に、身心を引き締め、自身の日々の生活を省み、お不動さまの怒りの表情を少しでも和らげられるよう、より良く生きて行くべきであろう。信心が実生活に滲み出てこそその宗教であると思うのである。

・縁日

毎月二十八日

・真言

ノウマク サマンダ バザラ ダン カン